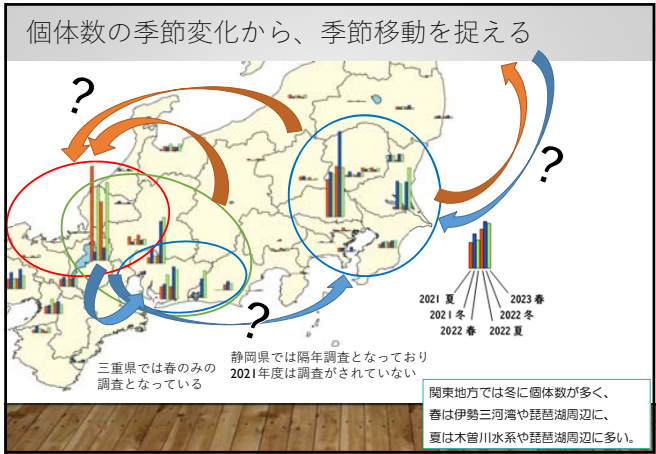
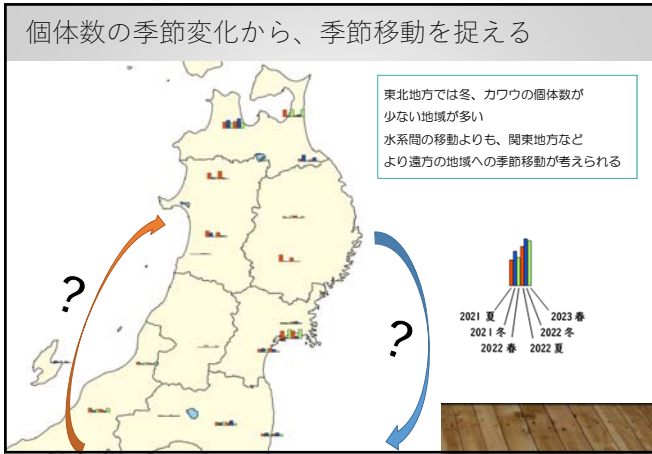
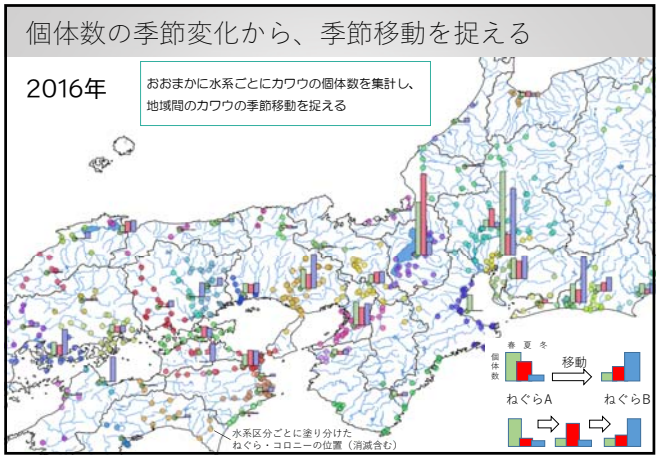
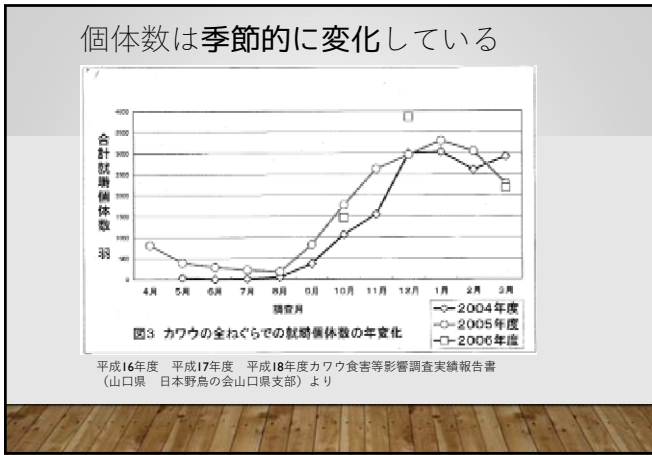
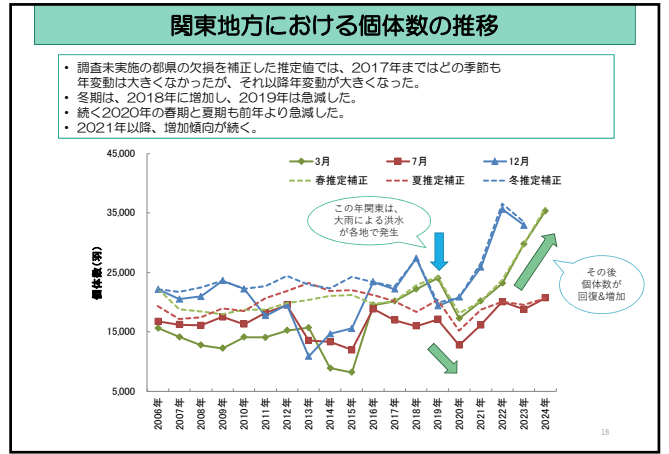
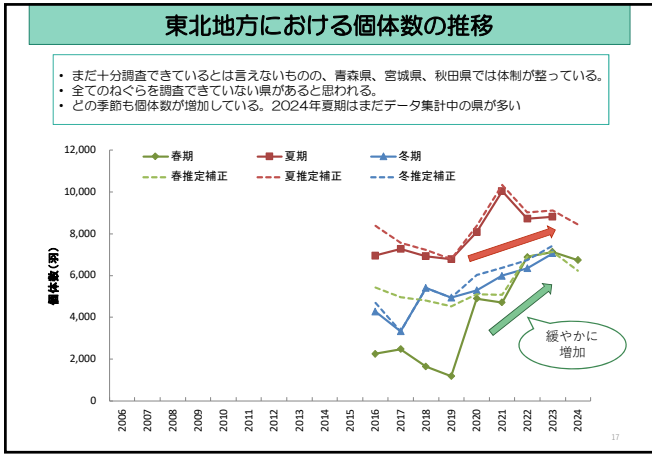
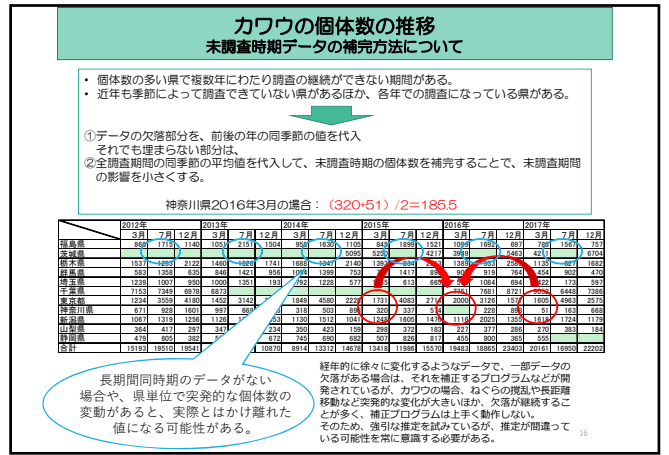
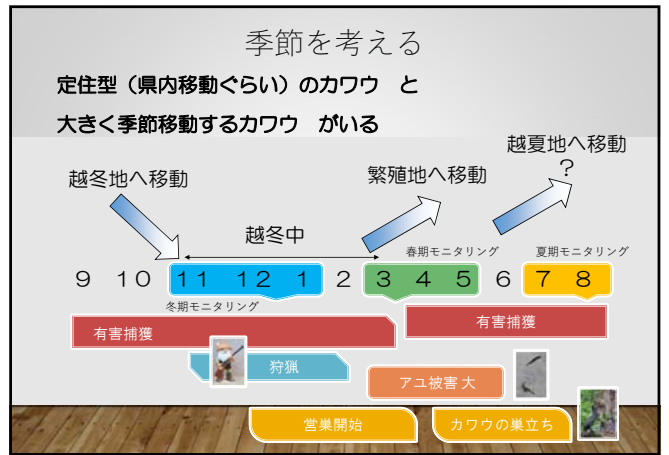
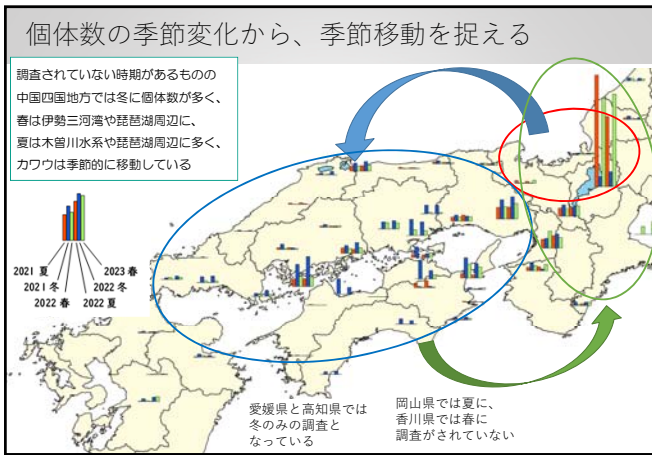


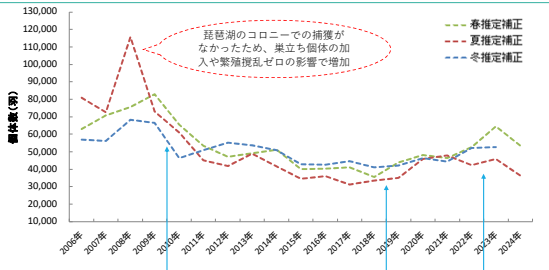
- ・ 個体数減少 & 分布縮小 → 回復 → 分布拡大へ
- ★ 広域でのカワウの季節移動
- ・ カワウの個体数の経年変化





中部近畿地方における個体数の推移

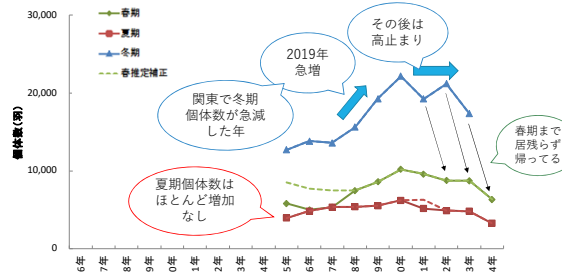
- 多くの県が継続して調査できているので、集計値と補正を加えた推定値に大きな差がない。
- 推定値からは、2020年夏期に個体数が増加したが、2021年はそれ程増えていない。
- 2023年はどの季節も個体数が増加していた。
- 2024年は個体数の多い愛知県・滋賀県で前年と比べて個体数が減少した



19

中国地方の個体数の推移

- 2024年春のデータは一部揃っていない。
- 他の季節に比べ冬期の個体数が多く、中部近畿地方などに移出して繁殖している個体が多いと推測される。
- 冬期は、2018年から個体数が増加しはじめ、その後高止まりしている状態。2024年はやや減少か

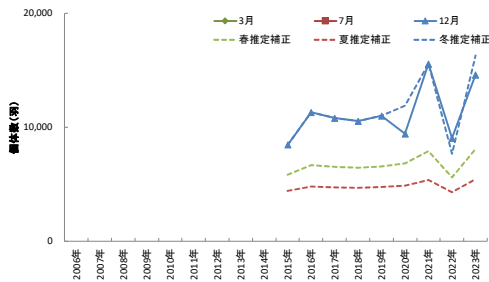


※岡山県では、夏期はわぐぐでの個体数調査ではなく飛来数調査が実施されている

20

四国地方の個体数の推移（春夏の推定）

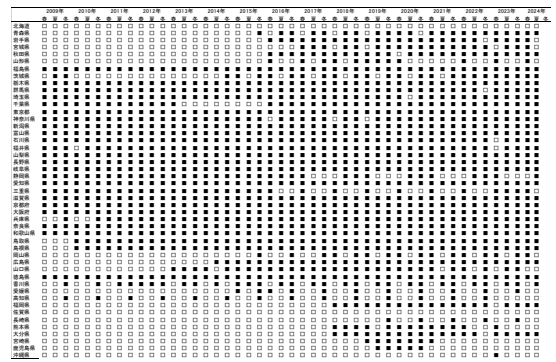
- 調査の実施されていない県が多い春期と夏期の個体数の推定を、個体数の推移が類似している中国地方のデータをもとに行った。
- 中国地方では、冬期の個体数と、春期、夏期の個体数には相関関係がみられる。
- そこで、その相対値を用いて、四国地方の冬期の個体数から春期と夏期の個体数を推定した。



21

全国のカワウの個体数の推定

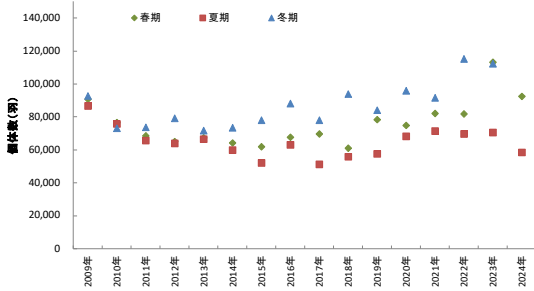
- 個体数のデータが得られている都道府県（2015年以前については調査データを得ていないだけの都道府県がある）



22

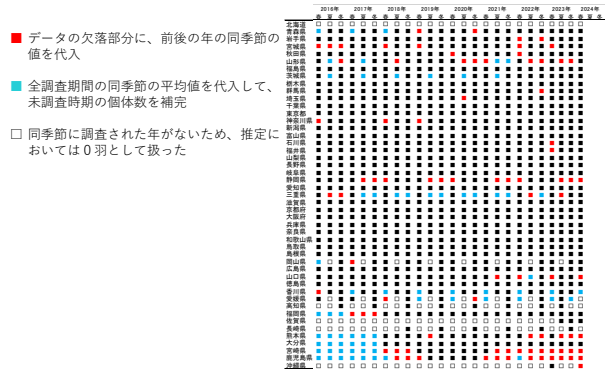
全国の個体数の推定

- 個体数のデータが得られている都道府県のデータを足した値をグラフにしたもので、グラフが示しているのは、少なくともこの個体数は全国にいたという下限値。
- 年により調査している都道府県が異なるため、経年変化は読み取るものではない。
- 春期の個体数は、2009年は9万羽、2023年が過去最多の11万羽、2024年は9万羽以上を息していた。



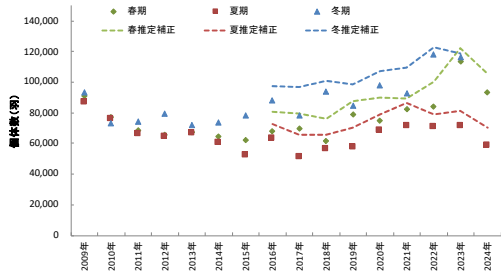
全国の個体数の推定

- 推定に使用したデータと補正方法



全国の個体数の推定

未調査月の値を前後の年の同じ季節の個体数等で保管する方法で求めた東北、関東、中部近畿、中国四国、九州沖縄の推定値に、北海道の営巣数の2倍（1巣に雌雄の親鳥のみがいると仮定）の値を加えて2016年以後の個体数の推移をグラフ化した。



25

2018-2024年春期のカワウの都道府県別営巣数



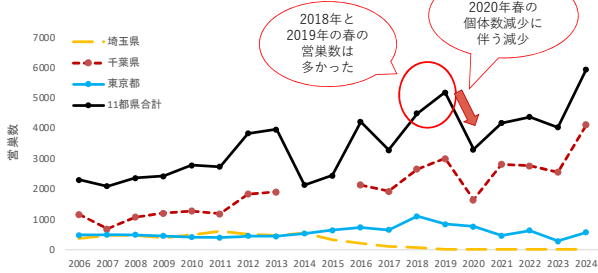
- 営巣数は、青森県、滋賀県、千葉県などで増加。
- 近畿地方、中国地方で減少傾向

北海道の2020年と2021年、愛知県の2019年は営巣数の多いコーナーで調査が実施されたが他の年は実施されなかった。香川県は冬期調査時の営巣数を使用した。

26

関東地方における営巣数（春期）の推移

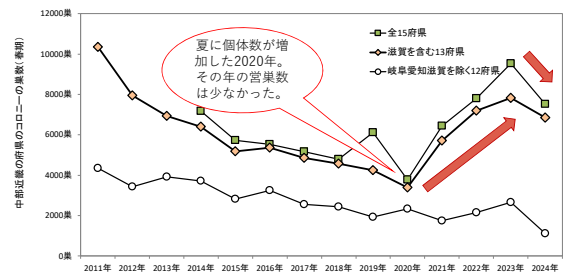
- 2018年と2019年の春は個体数の増加に伴い、営巣数も多かった。
- 2020年は、2019年冬の個体数減少の影響で2020年春の個体数が少なかったため、営巣数も少なくなった。
- 増減を繰り返しながらも、徐々に営巣数が増加している。



27

中部近畿地方における営巣数（春期）の推移

- 個体数は2020年の夏に増加したが、その年の春の営巣数は少なかった。
- 2021年以降は増加傾向にある。
- 愛知県で2019年と2023年に営巣数が多かったが、2024年は少なかった



28



つづく